

標高450メートルの風揚げ

この集落の風揚げは、ひと味違うらしい。何が違うかを確認しなければ、その地を訪れてみるのが一番手っ取り早い。百聞は一見に如かず、というやつだ。そんなわけで「ぶか風」と呼ばれるその風を見るため、6月初旬、天竜区龍山町瀬尻の寺尾地区に向かった。

国道152号沿いの瀬尻の通りを抜けたところで左折し、急峻な山の中を車で走ることしばらく。一気に視界が開けた場所に差しかかる。そこには風揚げ会場を示すのぼり旗。一見すると、風揚げに向いた場所のようには思えない。まして、寺尾は標高450メートルの山の中にある。風揚げには、当然のことながら風が必要なだろうが、その風は、どこからやってくるのかも、どんな方法で風を揚げるのかも想像がつかない。

風を読む

男性は宮澤さんといった。この行事を主催する保存会の代表だった。「今日はどうだろうね、雨は大丈夫そうかな」。宮澤さんは空を眺めながらいった。先日の天気予報は、この地域も梅雨入りした模様だと伝えていた。



「毎年6月第1日曜日にやることにしているんだけどね。今年は鮎の解禁日と重なったから、2週目にしてやったんだ。そうしたら今度は入梅。難しいもんだな」そう言っただけで笑った。瀬尻のぶか風揚げは、初節句を祝う伝統行事だ。5月の節句といふのはよく聞くが6月というのは珍しい。これは「5月は茶摘み」というこの地域の事情があるのだそう。こうした事情から、年によっては雨の心配をしなければならぬ時も少なくはない。

しばらくすると宮澤さんは、眼下の天竜川の方を見ながら「そろそろいい風が吹きそうだ」と言った。確かに、先ほどよりも道沿いに取り付けられたのぼり旗も静かにはためきはじめている。周囲の木々もワサワサと揺れだした。

「ここは、南北に流れる天竜川がぶつかった山の上にある。だから、山の斜面を吹き上げる南風で風を揚げるんだ。川がだんだん水面が白く波立って来るのを朝から待つ。川が鏡のように周りの景色が映り込むようじゃ、大風が揚がるような風は吹かない」と宮澤さんは教えてくれた。誰が始めに言い出したことかは分からないが、昔から風揚げの時には、天竜川の変化で風の動きを読むのだといわれてきたという。これが寺尾での風揚げの常識だ。

願いは大空に舞う

年配の人に聞くと、大昔は家々で風を

暮らしが見える。感じる体温。 Tenryu + Plus

揚げ、百もの風が大空を埋め尽くしたこともあったのだそう。その光景は、想像するだけでも心が躍る。昭和30年代に一度途絶えたという行事が復活したのは、平成になる少し前。子どもの頃に揚げた風をもう一度見たい、という思いを人々は持ち続けていたのだろう。また、瀬尻に住む人はもちろん、出身者も含めて、年に一度地元で集まる機会にしたいという思いも、ぶか風復活の大きな理由となったそう。

その後、保存会の手で風は毎年揚げられ続けてきた。今では、ここに住む人たちこそ少なくはなくなったが、毎年このために、東京などからも里帰りする若い家族も多い。そして、みんな力で合わせて風を揚げる。今年もまた、たくさんの人たちが集まって、次々に風が大空に放たれた。人々の願いは一つ。子どもたちの健やかなる成長だ。

瀬尻のぶか風は、およそ20畳ともいわれる大きさや「ブーン、ブーン」となる音が特長とされる。しかし、何といても最大の面白さは、風を揚げる人々と眼下を流れる天竜川との見えない対話にある。その日も午後3時頃になると、川は穏やかに流れはじめ、川面に青々とした龍山の山々が映り込むようになってきた。

宮澤さんは「今日は、もう風は吹かないだろうな。そろそろこの辺で終わりだ」と言った。それは、あたかも天竜川がそういうんじゃないかという顔だった。その後、大空を悠然と泳いで風は、ゆっくと糸に引かれ、人々の手に戻っていった。

天竜川が鏡のようじゃ、風は揚がらない。

